

いろいろなことを教えてくれる子どもたち ①



村石 京子

「保育」という仕事に携わるようになり、幼稚園で毎日子どもたちと一緒に過ごすようになってから、かなりの年月が経ちました。その年月の間によく感じたこととであり、最近その思いが次第に強くなってきたことに、子どもたちにいろいろなことを教えてもらっているという思いがあります。

本来なら、子どもと教師という関係で見れば、子どもたちにとって私は指導者であって物事を教えていく立場なのですが、実際には子どもに教わる場面が多く

あります。それは子ども同士の何げない会話の中にハッと感ずることもあったり、友だち同士のはげましあいであったり、子ども自身の持つ考える力や伸びていく力を見たときであったりします。あるいはそのひたむきさであったり、純粹さであったり、時には胸をつかれるような優しさであったりすることもあります。

また時には物事がうまく運ばず暗礁に乗り上げたような気分るときに、よい方向に助け舟を出してくれたら、新しい道を見つけてくれたりして問題解決の方法

を教えてくれることもあります。相手が幼児であつても、人と人との関係に於ては相手から教わるものが何と多いことでしょう。人間社会の関係は一方的に教える者、教わる者という関係で成り立つのではなく、お互に教えられたり教えたりという相互作用の関係でつくられ、前進しあつているのだと思います。

そのことに気づいてからは、もし私がいつも先に立つて子どもを指導してばかりいるならば、かえつて子どもを曲げてしまうような思いさえしてきて、つとめて子どもの内なるものを引き出したい、伸びていく芽をつまないように見守りながら必要に応じてサポートする、こんな立場をとる保育でありたいと思うようになりました。

長い年月も過ぎれば一瞬に凝縮され、一つずつの小さな出来事は消えていきますが、一つ一つの出来事は点であっても、積み重なり引き続けば線となつていきます。保育の中で感じる思いが点から線に伸びていくことを願つて、小さな事柄を少しずつひろっていくこ

とにしました。

● 先生の名前は？

私の組に四才児で入園し、父親の仕事の都合でその年の六月から三月まで家族中で渡米し、五才児になつてもどつて来た女兒（U子）がおりました。園に再び通うようになった当初は、園での習慣とか友だち関係などの面が円滑にいくかしらと母親ともども随分心配したものでした。その環境の急激な変化を乗り切るために、本人の努力は随分大きなものがあつたと思ひます。さいわい気性の明るい子で表面にはあまりこだわりを見せることもなくて、五才児の級にもどつてきました。

ただ時折、五才児なら当然わかっていると思われる事柄が理解されず、U子自身もとまどつたり、こちらもいつもと異なつた気づかひをしたものです。いろいろありました、その中でこんなことがありました。ある日のこと、遊んでいる途中でふと私の傍へ来てニ

コニコしながら、「ねえ、先生の名前、H先生でしょう？」と言ったのです。問いかけでしたが、それは尋ねるといふよりも自分の言ったことに承認を求めるといった感じの話し方でした。

子どもが自分の級の先生の名前を覚えるということ、自分の信頼をあげるような大きな意味をもっていきます。五才児の級の他の子どもたちは、前の一年間のつながりで担任の名前はよく知っていました。そばで聞いていた子が呆れたといったように、「へんなこと言うわね、M先生のことH先生なんてへんなこと言うのね。」となる口調で言いました。でも実は、U子の兄が以前こちらの園に在園しており、H先生の級であったので、時折家でも兄の担任の名前が聞かれていたでしょう。先生の名前といえばH先生というようにU子に印象に残っていて、それを確かめてみたような様子でした。そうした事情を知っているので、たいしたことではないのにその思いちがいを即座に訂正しが

たくて一瞬とまどってしまいました。

でもそのときすぐ傍にいたN子が「Uちゃん知らないのよ。」と言い、続けてY子が「忘れたの、忘れたのよ」とI子に向かって言いました。そしてさりげなく、「M先生よ。」と言ったとき、U子はきまり悪そうな顔ながらニコッと笑ったものでした。

自分たちの先生の名前を間違えるなんて呆れたといった感情を「忘れたのよ」という相手の立場に立ってかばってくれたY子の心の動きに相手を思う優しさがありました。子ども同士で教えたり、かばったりして育つよさを、その頃私の心の中でU子のことが比重を占める割合が大きかっただけに、嬉しく心に残りまし

(お茶の水女子大学附属幼稚園)